

カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

第17回 ルイス・クラレット氏 チェリスト

「そしてチェロはカタルーニャと密接に結びついたのです」



AMICS 1992年バルセロナ五輪閉会式でのビクトリア・デ・ロス・アンヘルスとの「鳥の歌」の名演をあらためてYouTubeで拝見しました。日本に初めていらしたのはその後でしょうか。

ルイス 94年です。あの閉会式での演奏が私を日本のカザルスホール（御茶ノ水にあった）へ導いてくれたのだと思います。当時カザルスホールでは毎年パウ・カザルスのオマージュとして4、5人のチェリストを海外から招聘して、来日したチェリストもそれぞれにリサイタルを開いていました。私は翌年か2年後にも再度招かれました。これがきっかけで、1996年に住野公一さん（当時、株式会社オートバックスセブンCEO、現相談役）がバルセロナに会いに来てくれたんです。彼はチェリストなんですよ。日本でのリサイタルのバックアップをしたいと申し出ていただき私も決心、主催者としてスピカの深澤さんが加わって1997年からは定期的に日本に来て指導と演奏会を続けて来ました。コロナの4年間は来日できずにほんとうに残念。今回はそれ以来です。

AMICS 日本や日本の方との出会いの印象をお聞かせください。

ルイス 初来日までは日本の事を殆ど知りませんでしたが、こうして日本との関わりが深まると日本人はカタルーニャ人と似ているところがあるのを実感します。初対面では少し固く、内向的な印象を受けますが、その後、とても深い関係性が築けて友情に至るのです。日本の方の感受性も繊細なように思います。コンサートの後にも演奏方法などについて深い詳細な感想を寄せていただくことがあります。ビブラートの出し方とかね。コンサートでもそういった細やかな聴き方をして出しているのですね。

明日の能楽堂コンサートではカタルーニャの作曲家J.M.ギッシュの「七句の俳句」を演奏します（注：日本初演）。俳句はスペイン語に

訳されてとても人気があります。この曲も、松尾芭蕉らの俳句からイメージされたものです。深澤さんに俳句を読んでもらった後、私が演奏していくという構成にしました。例えば一つ目の「曙や霧に渦巻く鐘の音」という芭蕉の句では鐘の音をピチカートで出します。繊細な強弱と日本的な響きを聴いていただけたと思います。

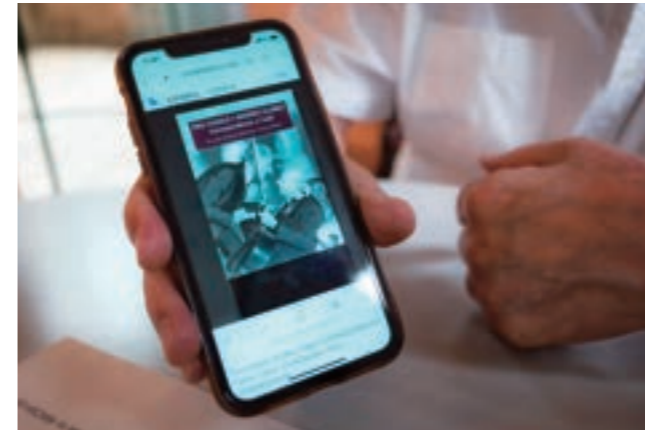
AMICS 指導を受ける生徒には違いを感じられることはありませんか？生真面目さとかイメージとかで。

ルイス 今回も東京音楽大学でマスタークラスを指導します。優秀ですよ。かつての日本の生徒には内向的なところがありましたが、最近はオープンになって来ていますね。ですのでカタルーニャの生徒との違い…これは其々の個性や性格があるので一概には言えません。今は日本人でオープンな人もいればカタルーニャでも内向的な生徒もいます。ただ日本人の生徒はあるメニューにのって課題をこなしていく「構え」が出来ています。カタルーニャの生徒達が日本に来ればそういう所を身につけられるだろうし、日本の生徒がカタルーニャに行けばもっと「自由」ということが学べるかもしれません。

AMICS クラレットさんはアンドラ生まれ、名付け親はパウ・カザルスですね。お父さまとカザルスさんの関係は亡命先で始まったのでしょうか。

ルイス 内戦が終わった時、両親はまだ知り合う前の段階でしたが、それぞれにフランス南部に移っていました。そこで父親がカザルスに会いました。父はアンドレウ・クラレットと言います。彼はカザルスを自動車であちこちに連れて行ったり、送迎したり、コンサートホールを手配したり様々な手助けをするようになります。内戦が終わるとカザルスは親を失った子供達のためにチャリティコンサ

クラレット氏の父親とパウ・カザルス



トをやりたいと考え、父がその相談に乗りました。これは父とカザルスの書簡集です（写真を見せて）。私の妻アナモーラが共著で出版しました。カタルーニャ語です。私がアンドラで生まれたのは、両親は亡命者同士だったのでスペインに入れなかったからです。どこで出産するかは選択肢はフランスか、アンドラ。結局、なるべくカタルーニャに近いところということでアンドラで私を生みました。

AMICS 「鳥の歌：Cant dels Ocells」について当時のことを聞かせてください。

ルイス この歌はカタルーニャの民謡で、生まれたばかりのイエスを様々な鳥たちが祝福しにやってくるというクリスマスの曲です。この民謡が次第にカザルスの代表曲、そして平和を祈る曲ということになっていきました。きっかけはカザルスがチャリティコンサートをいくつもやっている時期のことです。モンペリエの講演会にお偉いさんたちが集まっているのを見た父が「鳥の歌」を演奏してはどうかとカザルスに提案しました。1950年にブラド・カザルス音楽祭（注：南仏Plades、カザルス亡命の地）が始まると、カザルスは最後に「鳥の歌」を演奏するようになります。この音楽祭にはカザルスの演奏を聴くために、多くのカタルーニャ人が国境を越えて来ていました。その演奏は彼らにとっては、もはや単なるカタルーニャ民謡ではありませんでした。「鳥の歌」は平和を祈る気持ち、独裁政権に反対することそのものでした。その後もカザルスはコンサートでも講演会でも、すべてのプログラムが終わった後に「鳥の歌」を演奏することを続けます。カザルスのチェロ演奏によって、この歌はカタルーニャの魂に変わっていったのです。

「鳥の歌」から話を続けましょう。私には作家の兄（フランス生まれ）がいます。名前は父と同じアンドレウです。兄の本はカタルーニャ語文学に与えられるラモン・リュイ財団の賞をとりました。ノンフィクションではなく小説に仕立てられています。ここには父の人生すべてが書かれています。共和制の時代、亡命での問題、両親の出会い、カザルスと共にした時代、そして家族がバルセロナにどのように戻ったのかが書かれています。

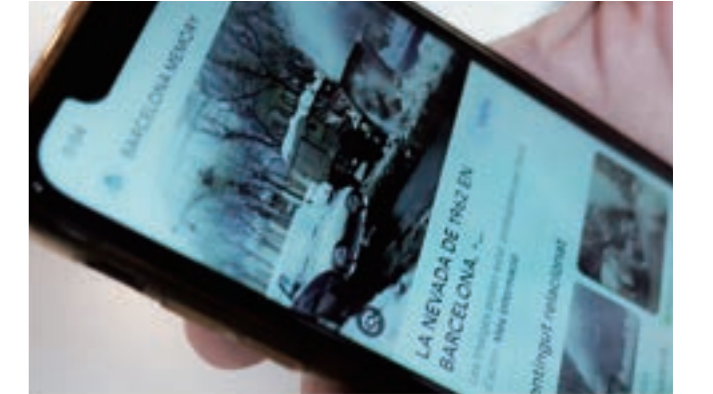
父はとても人間同士のコミュニケーションを大事にする人でした。ところがアンドラの冬は雪に閉ざされてしまい、フランスとのコミュニケーション（往来）がうまくいきません。そこで父はカタルーニャ政府に呼びかけてチームを作り、除雪車を調達して来たんです。これで道が使えるようになり、冬にもフランスと行き来できるようになったのです。父は「雪のおじさん」として知られていました。

今度は1962年にバルセロナに大雪が降ります。有名な大雪です。クリスマスの日でしたが、バルセロナ市長は困ってアンドラの父に除雪車でバルセロナに来てほしいと電話をしてくれました。まだフランコ



は存命中、独裁政権下です。私たちはパスポートも持っていませんでしたが、そのときから徐々にアンドラとカタルーニャの行き来ができるようになりました。アンドラ時代はフランス人学校でフランス語教育でしたが、64年に私はカタルーニャの学校に入ります。この写真がその除雪車です。大雪のバルセロナにとって、父は救世主のような存在になったのです。兄は本の中でこんな風に書いています。「フランスに逃れたときは、亡命者としてまさしく逃げていった。その私たちがバルセロナに戻るときは、ディアゴナル通りを除雪車に乗って、まるでバルセロナを開放するために来た勝者のように戻って来た。かつてフランコ軍が戦車でバルセロナに侵入して来たあのディアゴナル通りをね！」小説としてですがほんとうの話です。歴史のアイロニーです。

1962年のバルセロナ大雪を伝える記事



AMICS 驚きました。映画化されそうな話ですね！もう今日はここでクラレットさんにとってカタルーニャとは？とお聞きするのは野暮ですね。

ルイス 私のパスポートは「カタルーニャ」です。カタルーニャ！私の根幹！父も母もその家族もみなカタルーニャ！ルーツそのものです！カタルーニャ語、スペイン語、フランス語を母語としていますが、カタルーニャ語は特別です。思考する時、ものごとを考える時はカタルーニャ語で考えます。そうそう、孫はパウ・クラレットです。3歳半でチェロを弾いています。妻もチェリストです。日本のコンサートで3人で弾いたこともありますよ。チェロはカザルスとカサド*のおかげでカタルーニャと密接に結びついたのです。

※ガスパー・カサド：バルセロナ出身のチェリスト、作曲家。20世紀前半にカザルスに認められ演奏・作曲活動を続けた。妻は日本人ピアニストの原智恵子。

<AMICSの眼>

後半、驚きの話の連続でした。iPhoneで当時の写真を見せていただきながら、歴史がここで動いているような展開に面喰らいました。翌日の能楽堂での無伴奏コンサートはまさに日本の舞台とカタルーニャのチェロの夢クロッシングそのもの。双方のリスペクトが具現化したようなステージでした。ぜひ、来年6月の再来日を楽しみにしましょう。（取材/文 原正彦）

Lluís Claret

アンドラ・ラ・ベリャの生まれ。名付け親であるパウ・カザルスの影響でチェリストを志し、エンリック・カザルス（パウ・カザルスの弟）から徹底した音楽教育を受ける。13歳の時にバルセロナに移り、リセウ高等音楽院に入学。ポロニヤ国際コンクール（1975年）、カザルス国際コンクール（76年）、ロストロボーヴィチ国際コンクール（77年）で次々優勝を果たし、一躍注目を集める。バルセロナ五輪の閉会式でカタルーニャ民謡「鳥の歌」を演奏する。その後も世界的な活動を続けている。現在、ニューイングランド音楽院（ボストン）教授。

注）お名前Lluísの発音は「リュイス」がより正しいですが、日本で同氏が「ルイス」と表記されていますので、本紙も「ルイス」といたします。